

## 「コスモス」に拠った歌人たち

森田 治生

わが歌は田舎の出なる田舎歌素直すなはけんめい懸命うまに詠うた  
ひ来しのみ  
宮柁二『純黄』

宮柁二が紫綬褒章を受賞した際、自身の歌の原点について詠んだ一首である。多少は謙遜が入っていると思うが、平明な言葉で述べられた歌への洞察が心に響く。では、ほかの歌人たちはどうだろう。自身の歌をどう評し、そのことをどう詠んでいるのか、また歌を詠む姿勢に触れた歌はあるのか、柁二とともに多磨・コスモスに拠った四人の歌人、初井しづ枝、田谷鋭、葛原繁、安立スハルについてそれぞれの歌集を当たってみた。

### 【初井しづ枝】

一九〇〇年誕生。四人の中ではただ一人明治生まれで、柁二より十二歳年長である。一九七六年に七十六歳で逝去した。素封家だった婚家は戦後の農地解放による混乱で生活環境が激変したが、困難な時期にあっても清新な歌風は失われていないことに驚く。端正な自然詠は今読んでもあまり時代を感じさせない。歌集からは自身の歌について詠んだ歌は見つけられなかったが、歌に対する姿勢については第一歌集『花麒麟』のあとがきに書いている。

先生はその芸術精神を「多磨綱領」に縷々披瀝して「正しく短歌の伝統に立ち、更に近代の感覚と知性によつて、近代の幽玄と呼ぶべき象徴美の創造を希求する」といふ宣言をされた。私は覚束ないながらもその示された道を歩まうとした。もとより菲才の私が先生の完璧なる歌風そのまを志すことの無理は知つてゐたからその徒労はしなかつたが、先生の著しい特徴であるところの作品の立格と香気には聊かでも薫染したいと希つて絶えず努力した。

ここで述べているように、白秋の教えを継承する強い意思をもつてその後も作歌活動を続けコスモス史を語るとき欠かせない歌人のひとりとなった。

なお、「立格」は誤植で正しくは「律格」だと全歌集の解説の中で柁二は書いている。

### 【田谷鋭】

一九一七年生まれで、二〇一三年に九十五歳で逝去した。四人の中では一番の長命であつた。

わが歌を寂しきうたと決論すされどその歌  
を徹とほすほかなき  
（『ミモザの季』以後）

二〇〇八年九十歳の時の歌。冒頭の柁二の歌も晩年に詠ま

れている。若いころは自分の歌を振り返る必要も余裕もないほど歌に没頭していたのかもしれない。自分の歌の来し方に思いをいたすにはある程度の年月を要するのだろうか。

この歌では「寂しき」をどう解釈したらよいのか。単なる「寂しい」ではなく「心が満たされない」「不満足である」という気持ち強いように思う。結局は、年齢的に今さら変えることは難しいという諦めより、自分の歩んできた道を肯定しているのだと受け取った。

歌つくる利点は何か考へて思ひ当らずかく  
て眠る夜  
（『ミモザの季』以後）

歌つくる我は隣家のやも男より仕合せと思  
ひ夕空仰ぐ

こちら晩年の歌。歌を詠む利点とは何かを考えて思い当たらなかったと言う。そもそも歌は利点を求めて詠むものではないので当然だとも言える。しかし、二首目を読むと何らかの利点は感じているようだ。同じやも男なのに歌を詠まなればかりに比較された隣人はなんとも気の毒だが。

次に作歌に対する考えがうかがえる歌を紹介する。

「如く」の文字避けて作れる歌といふ何故  
に避くるや理知らず  
（『ミモザの季』以後）

とりたてて何かの語句を嫌ふとき表現はか  
すか歪みゆかむを

「如く」といふ言葉どこでも嫌はるる学校  
にあるいぢめのやうに

「如く」の使用についての歌。「如く」は歌が曖昧になる

ので、使わずに言い切った方が良いと言われる。杓子定規に「如く」を否定する発言でもあったのだろうか。二首目では特別な言葉が無条件に排除する弊害を述べる。三首目、それにしても「いぢめのやうに」とは随分強い言葉のように思われる。

「古いコトバ使つては新しい歌はできぬ」  
しかく言ふ人証明をせよ

新しい言葉を使えば歌が新しくなると思っている人を、片仮名の「コトバ」を用いて痛烈に批判している。歌の本質を見極めることなく表層だけを無条件にとらえる風潮への警鐘のようだ。

歌に対する姿勢は『水晶の座』（一九七三年）のあとがきから知ることができる。

北原白秋などによつて示された美の世界が、あらたな意味をもつてわたしの心内に蘇ってきたからでもある。わたしは自分の歩んできた道を、狭く貧しいものと感じて心たじろぐことがしばしばであった。時が経過し、文學の上ではわたしのやうな營爲も意味あるものとみづから慰めるやうになつたし、わたし自身の作品にとり立てて變化は現はれなかつたが、この経験はわたしの内部に一つの問題を投げかけ、あらたな行手を暗示したと思ふ。

【葛原繁】

一九一九年に生まれ、一九九三年に七十四歳で逝去している。初井と同様、自身の歌について詠んだ作品は見つけられなかったが、歌集を読むと「コスモス」と柘二への敬愛の気

持ちがあふれていて、誠実に歌を詠む歌人としての矜持が随所に感じられる。

短詩型を愛し「コスモス」に拠れることその志遂げむと想ふ  
『玄』

移り行く世相に挑戦せしごとき二十年なり

きコスモスに拠りて

『又玄』

かすかなる生といへども「コスモス」と共に

にありけり二十五年を

『又々玄』

コスモスに拠り来し幸を思ふなりただに有

難しあの声この声

『鼓動』

ひたむきに生き得たる幸思ふなりコスモス

の中心に君ましまして

第一歌集『蟬』そしてそれに続く未刊行の歌では戦後の社会や職場の労働争議そして自身の結婚など卑近な題材を写実的に詠んでいる。しかし、三部作歌集『玄』『又玄』『又々玄』以降は次第に韻律を重視した自然詠を詠むようになった。その理由が三部作歌集のあとがきに書かれている。ここから葛原の歌を詠む姿勢の一端を垣間見ることが出来る。

この定型短詩の持つ形式と韻律の制約を逆の武器として、対象が直接に訴えて来る存在感と表現手段としての言葉の内容、詩形の韻律との緊密な一体化を遂げることにより、確認と表現の間に介在するもろもの制約と抵抗を乗り越えて、形象の表現を精神そのものの表現に転化させてゆくことは出来ないかという願ひであった。そうした指向は韻律と音感をより重視する方向へ私を向わせた。

何を詠むべきかいつも悩むことだが、葛原の逝去の年の歌がわれわれへの遺言のように思える。

必ずや人を打つべし生活に根ざす真実を君  
ら詠みませ  
『鼓動』以後

【安立スハル】

一九二三年生まれ。二〇〇六年八十三歳で逝去。若いころ療養生活を送り、三十歳まで生きられるかと危ぶまれた安立にしては長命と言えよう。一九八〇年に「いかならむ世か知らねどもあな羨し二十一世紀に会はむこの子ら」と詠んだ時には二十一世紀を迎えることはできないと思っていたのだから、何とか新しい世紀に出会うことができた。

四人の中では一番短歌に関係する歌を遺している。自身のことについて直接詠んでいるわけではないが何首かみていく。

わが心こめし歌よりわが握りしむすびは人  
をよろこばしめつ  
(『この梅生ずべし』以後)

心をこめて詠んだ歌と握り飯との意外な比較から、世間一般における短歌の位置づけを示している。いくら心を込めて詠んでも握り飯ほどは喜ばれない。嘆きと諦めの気持ちも伝わってくる。少し寂しくなってしまうが、これが現実だろう。

九十年生きたる母をよろこばすことが第一

歌は二の次

晩年の安立は母の介護に明け暮れた。若き日に療養生活を送った娘を献身的に看護してくれた母。介護が必要になった母を喜ばせることが第一で、歌は二の次という。心で思ってもあまり口にしないことをはつきり言うのが安立らしい。

介護を受けた母が九十七歳で亡くなった時、安立は七十六歳だった。母亡き後の作品の多くは挽歌であり、母がいかに大きな存在であったかがわかる。(ひとの死を悼みて詠むは生き残るおのが心を鎮めむがため)という歌が切ない。

その辺にころがつてゐる言葉もて歌詠まむとすすなはち怡し

歌を詠むのに特別な言葉を使う必要はない、その辺に転がっている普通の言葉で詠めばすなわち楽しいという。安立の信条がうかがえる。至言ではあるが、その辺に転がっている言葉で普通以上の歌を詠むことはなかなか難しい。

短歌とは魂たましひにして漣のやうにかがよふ心より来る

「短歌とは」と単刀直入に詠み始め、歌の本質を衝いていて清々しささえも感じる。

歌を詠むよろこび知るは知らぬより少しだけまさるこの世の幸の

「少しだけまさる」と言われると物足りないのだが、実感ではなく控えめな表現なのだと思います。

歌によりいのち確かめむ生きるとは考へること仕事すること

最晩年、死の数年前の歌である。「歌によりいのち確かめむ」とは「生の証明」に他ならない。安立にとって歌とはなんであったかを教えてくれる。

安立は生涯でただ一度、四十一歳の時に歌集を刊行している。その歌集『この梅生ずべし』のあとがきで、歌を詠む姿

勢、そして生きる姿勢を強く打ち出している。

いい加減にごまかそうとせず、ともに生きることを考えれば、いつでも一寸先は闇です。どこにも光はありません。どこにも光がないのなら私はそれを自分でつくり出すほかないのです。唯一独自の置き換えのきかぬものを、私は身をもって創り出さねばならないと思いました。私は自分の不幸を活かそうと思いはじめました。不幸の哲学を履行しようというのではありません。その逆です。私はよろこびをもってそれをやりはじめたのです。

四人の歌人の全歌集を読んだが、自身の歌について詠んだ歌は少なかつた。歌を詠むことに対しては「利点は何か考へて思ひ当らず」(田谷)「よろこび知るは知らぬより少しまさる」(安立)など控えめな歌がみられた。しかし、本当にそうであつたら半世紀にわたつて詠み続けられる訳がない。歌への思いを直接詠んだ歌は多くないが、四人が歌を愛し真摯に取り組んできたことは遺された歌からひしひしと感じられ、大きな教示を受けた。

最後に宮柊二の歌を挙げて小文を閉じる。悲しいが淨い、苦しいが楽しい。そのような短歌に近づけたらと思う。

歌詠むは悲しと思ひ詠まぬよりは淨しと思

ひ歌を思ふ夜

『藤棚の下の小室』

苦しみて歌つくるわれ楽しみて歌つくるわれいづれぞわれは

『緑金の森』